

令和4年度 牧之原市議会

総務建設委員会視察研修報告書

視察日 令和5年1月25日（水）～ 1月27日（金）

視察先 福岡県八女市

「八女福島の町家再生と地域活性化について」

宮崎県宮崎市

「青島ビーチパーク事業について」

宮崎県綾町

「有機農業のまちづくりについて」

視察研修報告書

牧之原市議会議長 様

氏名 太田佳晴

研修名 令和5年度 牧之原市議会総務建設委員会視察研修
研修の期間 令和5年1月25日(水)～1月27日(金)
研修先 (1) 福岡県八女市
(2) 宮崎県宮崎市
(3) 宮崎県綾町
研修の目的 (1) 八女市：八女福島の町家再生と地域活性化について
(2) 宮崎市：青島ビーチパーク事業について
(3) 綾町：有機農業のまちづくりについて

・八女市：八女福島の町家再生と地域活性化について

寒波の影響で福岡便の運行が心配されたが、私たちの予定した便は欠航されることなく、福岡空港まで無事に到着したのは幸いであった。また、悪天候が予想された中でも、八女市の議会事務局、企画部 定住対策課の皆様のご厚意で受け入れていただき、目的とした研修を行うことが出来たことは、たいへん有り難く思いました。

八女市の町家再生への取組で、とても素晴らしく当市が到底及ばないと感じたのは、「町並み保存」という目的を掲げ、長い年月を費やして着々とその事業を進めているまちの姿勢についてです。

そこには、時代が流れて首長や職員の担当者が変わろうと、まちの取組みとしての変わらない意志を貫こうとの、不変の強い信念が常にあったからこそ、現在の成果に結びついているのだと思います。

牧之原市が誕生してから4期16年の歳月が流れてきましたが、八女市の町家再生のように、まちのライフワークのような位置づけで進めてきた、未来のまちづくりのための事業が私たちのまちにあったでしょうか。

少子高齢化が急速に進む時代の流れのままに時間が流れて、気がついたら若者も増えていかない、そして人口減少に歯止めがかからず、このままでは将来まちの存続も危ぶまれるという危機感だけが存在している。

ある意味、それが今の牧之原市の姿にも思えてくるが、八女市の町家再生のお話を聞く中で、長い歳月をかけて市民とともに取組み、歩んでいく事業があるこ

とも、まちが成長し人が育っていく要素になり得るのかなと感じ、学ぶべきは特色あるまちづくりを進めていく上での、揺るぎないまちの姿勢だと思いました。

当市の相良は、意次侯の御城下で城下町ではありますが、これから当時のまちの全体的な復元は厳しいものがあるかと思えます。しかし、一部の区域（飲食通り）等を特定の地区として御城下風にすることや古民家を改築した情緒ある町家ホテルの整備などの試みは、関係者の総意がまとまれば可能と考えます。

・宮崎市：青島ビーチパーク事業について

牧之原の海水浴場は、白砂青松、波は静かで遠くには富士山を望むことができ風光明媚、そして快適で安全です。

このような謳い文句で、地域の自然資源だけを売り物にして、入り込み客が減少していくのを、毎年为天候不順等を理由にしてきた結果、牧之原市の海水浴場は年々衰退を続けてきました。

これは牧之原市だけの問題ではなく、国民の意識の変化により、全国的に海水浴離れが進んでいるのは現実の問題ではありますが、このような状況でも客足を取り戻し、賑わいを見せている海岸はあります。

今回視察研修を行った青島ビーチパークは、斬新な発想で海岸に賑わいを創出、圧倒的に負け組の多い海水浴場の中でも数少ない勝ち組の一つです。

では、どうして勝ち組の海水浴場になり得たのでしょうか。

近くには、国の天然記念物「鬼の洗濯板」や青島神社などがあり、確かに立地条件には恵まれています、私たちの地域とは大きく違いを感じるがありました。それは、過去最低の入場者を記録した、その時の問題意識が全く異なっていたということです。

私たちのまちでは、猛暑の夏には、暑すぎてみんな外には出なくて入り込み客が減少したと言い、台風が来て海が荒れたり雨が続いた年には、天候不順に影響されたのが原因だと言い、毎年紋切り型の総括をしてきましたが、その意識改革から進めないと、当市の勝ち組への仲間入りは、今後も到底かなわないと思いました。

見学した青島ビーチパークは、それほど大きな資本をかけて整備を行ったようには見えませんでした。しかし、成功のカギは、海岸整備を進める上での様々な行政上の許認可の壁を、大苦勞しながらも乗り越えていったように、やり遂げるといふ強い意志を持つことで、それが成果を上げてきた一番の要因だと感じました。

絶対に破ることができないとされてきた法律上の許認可の壁も、自治体が必要としてやる気さえあれば、破ることも不可能ではない時代になってきたということ再認識することが、海岸再生のスタートラインに立つことだと思えます。

また、斬新な発想を持つ人材の発掘と育成も、牧之原市の大きな課題だと考えます。

昨年 9 月の当委員会の提言書にも含みましたが、安心して楽しめるキャンプ場の新設は是非とも実現していくべきとの思いを、改めて強く持ちました。

例えば、宮崎市が民間委託している「宮崎白浜キャンプ場」のレイアウトを参考に、南国情緒漂うキャンプ場を海岸通りに整備、また、青島ビーチパークのように海を見ながらのんびりお茶を飲めるようなスペースも、海岸の魅力を高めていく上で大切な要素になるのではないのでしょうか。

・綾町：有機農業のまちづくりについて

「自然環境保護の重要性に気付き、環境と産業の調和こそがまちの生き残る道」、このことを 30 年以上も前の昭和の時代から意識して、まちづくりを進めてきたことに驚きました。

すでに当時から、地球温暖化による環境破壊、自然保護の問題、健康志向の高まりから有機農産物へのシフト、また、人口減少社会の到来による存続をかけた自治体間競争までも視野に入れてまちづくりを考えていたとすると、当時のまちのリーダーの先進性は素晴らしいものがあったと感心します。

私たちのまちでも有機農業を手がける農業者はおりますが、まだまだ数は少なくご苦労が多いと推察します。なぜならば、綾町の農家でも有機栽培された農産物がそれほど高値では販売されていないとのことで、有機農業のこれからの広がりには、有機農家の所得の向上に掛かっているのではないかと思うからです。

お茶栽培も有機に取り組んでいる農家もあると聞きますが、隣接する圃場の農薬の散布等の問題があるために、気苦労もありたいへんだと思われま

す。今後、市がオーガニックを方針として進めるについて、農薬、化学肥料を使う慣行農業を決して否定することは出来ないので、有機農産物専門の店舗を設置して、そこで扱う有機農産物は、値段は高いがオーガニックである等、特徴ある販売形態を考える必要があるように思います。そして、農家所得が向上することになれば、徐々に有機農業を手がける農家も増えていくのではないかと考えます。

このように、今後、市では有機農業者の所得向上のための環境整備も、併せて積極的に行っていくことが必要ではないでしょうか。

説明していただいた有機農業振興係の小八重係長は、農業経験もない中まだ経験も一年あまりと浅いとのことでしたが、女性でありながら綾町の有機農業について専門的な知識を持っていることに感心しました。

視察研修報告書

牧之原市議会議長 様

氏名 原口 康之

研 修 名	令和5年度 牧之原市議会総務建設委員会視察研修
研修の期間	令和5年1月25日(水)～1月27日(金)
研 修 先	(1) 福岡県八女市 (2) 宮崎県宮崎市 (3) 宮崎県綾町
研修の目的	(1) 八女市：八女福島の町家再生と地域活性化について (2) 宮崎市：青島ビーチパーク事業について (3) 綾町：有機農業のまちづくりについて
<p>(1) 福岡県八女市：八女福島の町家再生と地域の活性化について 伝健地区（伝統的建造物群保存地区）のまちづくりについて</p> <ol style="list-style-type: none">1, 八女市の概要2, 八女福島伝健地区の歩み3, 伝建築のまちづくりに関わる人や組織4, 伝統的建造物の保存と活用5, 行政の支援6, 特徴的な取り組み7, 電建地区内の賑わいづくり <p>について、八女市企画部定住課町並み景観係の職員から7項目の説明を受けた。八女市は、内陸で熊本県と大分県の県境に接している福岡県で2番目の面積を有し人口約6万人、産業は農業（八女茶、電照菊、いちご）と伝統工芸（仏壇、提灯、手すき和紙、石燈籠）の職人の街である。市内には、八女福島地区と黒木地区、2ヶ所の伝統的建造物群保存地区があり今回は八女福島地区の商家町へ説明を受けた後、実際に足を運んだ。町屋は、伝統的な仕事場を兼ねた商人や職人の短冊形の家屋が多数残っている印象を受けた。牧之原市の場合、町屋と言うよりも商店街の再生が主になるがそのヒントとして、①商店街の再生活用するための積極的受け入れ②そのための空き家の家主と地元住民の理解③商店街の再生を担う組織づくりと持続的な活動④それを支援する行政や商工会等の連携と継続的な支援などと実際行われている部分の検証が必要と考える。</p>	

(2) 宮崎県宮崎市：青島ビーチパーク事業について

青島ビーチサイド活性化プロジェクトの概要についてと委託事業の概要などについて宮崎市観光商工部観光戦略課の説明を受けた。宮崎市は九州南東部に位置し太平洋に沿って 36km の海岸線を有し沖合を通る黒潮により温暖な気候風土に恵まれる人口約 40 万人の県都、中核市である。活性化プロジェクト説明の第一声はやはり日南海岸国定公園内での観光拠点の開発についての国と宮崎県の両者への自然公園法関係の承認と普通財産貸付の合意に 10 年余を費やした。その間の交渉に相当の苦勞が伺える。また、そのプロジェクトに携わる行政、民間の成功に導く綿密なビジョンと計画、信念ある人材を確保することが必要と考える。牧之原市でも 15km の海岸線を 3 つのエリアに分けて活性化をそれぞれの地域の特長を生かし進めているが、しっかりとした地域ごとのビジョンに沿って、短期と長期計画を立てそれを遂行出来る行政・民間の人材を集めて、いなければ人材育成も視野に入れて長期にわたり実行推進していくには、目的を完了するまで指揮できるリーダーが行政側と民間側にも必要ではないか。

(3) 宮崎県綾町：有機農業のまちづくりについて

綾町の自然生態系農業 ー持続可能な美しいまちをめざしてー について綾町有機農業振興係から説明を受けた。綾町は宮崎市の西方約 20km、宮崎県のほぼ中央に位置する山間地域で、牧之原市の面積が約 1 1 1 km² に対し約 95 km² のうち 80% が森林で、残り 20% に約 6800 人の住宅地と農地が町の東側の平野部に集中している町である。早くからまちづくりに自然生態系農業を取り入れ、綾町憲章（昭和 58 年 3 月制定）にも第一に「自然生態系を生かして育てる町にしよう」とうたわれている。また、本当に自然が豊かで照葉樹の恵みはユネスコパークにも登録されている。憲章に続き「綾町自然生態系農業の推進に関する条例」（昭和 63 年 7 月制定）も制定され町を挙げての取り組みを始める。化学肥料や農薬不使用は言うまでもないが、土の力を最大限に利用するため土壌診断表を作成し土壌分析を町単独で令和 2 年まで行うが以後は大分の分析センターに委託する。町単独での自然生態系認証の基準の仕組みを作成、段階に応じた生産者の出荷先の選定。しかし、あくまでも食への安心安全のこだわりをもとめるのは消費者であることが前提でどこまで消費者のニーズにこたえるかが問題であると考え。牧之原市においても少しでも、食への安心安全への取り組みから始める必要性を感じるが綾町での農地の雑草のないきれいな光景を目の当りにすると市内では、販路先において価格が釣り合うかがカギになると考える。

視察研修報告書

牧之原市議会議長 様

氏名 植田博巳

研 修 名	令和5年度 牧之原市議会総務建設委員会視察研修
研修の期間	令和5年1月25日(水)～1月27日(金)
研 修 先	(1) 福岡県八女市 (2) 宮崎県宮崎市 (3) 宮崎県綾町
研修の目的	(1) 八女市：八女福島の町家再生と地域活性化について (2) 宮崎市：青島ビーチパーク事業について (3) 綾町：有機農業のまちづくりについて
<p>1 はじめに</p> <p>牧之原市は人口減少と茶価の低迷、海岸利用客の減少が顕著である。これにより、市内の商店街への人流が滞り、将来的な経営の不安などから空き店舗も増加している。</p> <p>このことから、人流を増加させるため通年型の海岸活用策、人流を引き寄せる魅力的な商店街の再生及び、有機農業導入による農業経営の安定化を目指し、市内の経済的な好循環を促進することが「牧之原市の次世代につながる持続可能なまちづくり」の一つとなる。</p> <p>これらの課題解決として、先進事例を参考に牧之原市にマッチした活性化策を検討し、提言に結び付けるため視察研修を実施した。</p> <p>2 先進地視察</p> <p>(1)八女市：八女福島の町家再生と地域活性化について</p> <p>八女市は、福岡県南東部で、熊本県と大分県の県境に位置し、昔から交通の要所として発展、主な産業は八女茶と仏壇などの工芸品であり、人口は2008年合併時7.1万人が現在6.1万人、15年間で1万人減少している。</p> <p>八女福島町は伝統的な建造物が多く、伝統的建造物群保存地区として指定を受け、伝統的な建造物の保存と活用を実現している。</p> <p>2022年7月の時点での空き家空き店舗は約16件存在し、高齢者が多くすぐに空き家が増え、取り組みはエンドレスとのことである。</p>	

まちづくりは、1995年（28年前）台風で町屋が大きな被害を受けたのをきっかけに住民組織12町内会が「八女福島街並み保存会」が発足し、「街なみ環境整備事業」（国交省）で町屋等の修理・修景事業を開始、その後、「NPO八女町街並みデザイン研究会」が建築士・職人の建築集団、空き家再生専門集団が町家再生に向け取り組んできている。

その推進体制は、街並み保存会が中心となり、まちづくり市民7団体、2社のまちづくり会社、住民、行政と連携した公民連携で取り組んでいる。

取組の成果

八女福島町は商人が活躍した町であり、地元の建築士・大工、左官、建具職人が修復作業を行い、若者の担い手を育て、技術の継承も併せて実施されている。当時のままの姿に復元され、店の経営者は移住者が多く、観光客も多い。

（考察）

古き良い歴史を持つ大切なまちを次世代に継承していこうとする多くの住民の熱意が公民連携によりまちを再生させていた。その推進体制の中心には、長年この事業に取り組んできた方の存在があったからこそその成果である。

八女福島長を参考とすると、例えば、相良商店街の再生にはここしかない田沼意次侯時代の歴史的価値の復元とその中に魅力的な新たな価値となるお店の参入を呼び込むことが重要と考える。

この実現には、商店街とその周辺の歴史的エリアを設定し、まち再生のプランニングが重要であり、その実現化には公民連携による計画作成、市民を中心とした専門団体の編成など、まちづくり推進体制の構築が必要である。

（2） 宮崎市：青島ビーチパーク事業について

青島ビーチは、通常20万人海水浴場来場者数が平成26年に過去最低の7万人に落ち込んだ。このことから、海水浴場にかかる市民アンケートの実施により30年ぶりの海の家復活が検討され、平成27年に公有地を利用した新たなビーチの楽しみ方を目指し、来場者増加及び地域経済と青島地域の活性化を目的として「青島ビーチパーク」が開設されている。

事業は、宮崎市観光協会とNPO法人宮崎ライフセービングクラブの共同体による「港の交番青島プロジェクト実行委員会」が主体となって実施されていた。海水浴場来場者は、平成28年度に23万人（54営業日）と通常来場者20万人を超え、ビーチパークには14万人（139営業日）となった。その後コロナの影響から営業日数も減少したことから、R3年度は4.6万人となっている。

青島ビーチパークは、海水浴場の一角に常設コンテナを活用した飲食店舗、ベンチ、テーブル、シェードボックスなどを設置し、R4年度から通年営業をしている。

施設は、宮崎県用地にあり、公共財産から普通財産に変更している。これは宮崎県が地域の活性化として認定して変更したもので先進事例として参考としたい。また、青島ビーチサイド活性化プロジェクト事業により、廃業したホテルの敷地(財産区所有用地)に民間事業者による宿泊施設が2022年から開業している。

(考察)

相良・静波海水浴場来場者は、平成2年には200万人を超えていたが、コロナ前のR元年には20万人とピーク時の1割、R3年度は8.5万人と危機的な状況となっており、市内経済への影響は甚大となっている。市の経済活動の一つとして海岸を通年活用し、観光客の増加を促す対策が喫緊の課題である。

常設施設設置など海岸利用にあたっては、県有地と港湾の使用規定の制約があり、公共用地から普通財産に変更した宮崎県の事例大いに参考となるものであった。

青島ビーチパークを参考に、海水浴来場者が減少する危機意識を民宿など関係者と共有し、「さがら・静波・地頭方海岸」それぞれの景観や特徴を生かした海岸活用策、活性化のコンセプトによるプランニングを海岸活性の専門性を有するクリエイターとともに公民連携のプロジェクトチームを立ち上げて聞くことが重要である。

また、この海岸活性化プランと商店街活性化プランとも連動した人流の動線づくり、まちづくりを進めることが経済の好循環につながるものと考えられる。

(3) 綾町 : 有機農業のまちづくりについて

持続可能な美しいまちを目指して、自然生態系農業を実践している宮崎県綾町は、人口6,700人余の農業を基幹産業としている町。

自然生態系農業は、1973年の一坪菜園の普及と野菜種子の配布が起源で1933年(S63年)の7月「綾町自然生態系農業の推進に関する条例」が制定された

約束事として

1 化学肥料・農薬などの科学的に合成されたもの使用しない。

2 土の力を最大限に利用

3 安全・安心できる農産物の生産

4 消費者に信頼される農業

考え方は

1 健康な土づくり

(1) 土壌診断の実施 (2) 有機質肥料の使用 (3) 深く耕す (4) 土壌消毒剤は使用しない

2 元気な作物を作る

(1) 化学合成農薬・除草剤は使用しない (2) 遺伝子組み換え作物は使用しない (3)

天敵や微生物農薬等を利用する

これらの約束、考え方の下、し尿、生ごみ家畜糞尿をコンポスト化や堆肥、液肥を施肥し、循環型の有機農業を確立している。

また、認証制度を設け農産物のランク付けにより、認証シールを添付しての販売がされている。

また、綾町は町として全国唯一の有機 JAS 登録認証機関となっている。

(考察)

町全体が有機農業経営体として実施され、それは民間企業の経営体制のように感じた。

自然に負荷をかけない農業を目指した、当時の町長のリーダーシップが現在の農業を確立したとのことで、ふるさと納税額も増加している。しかしながら、有機野菜の付加価値が価格に反映されていないことから、自然生態系農産物、有機 JAS 認証の付加価値をつけること農家の高齢化のため担い手の呼び込みが課題で、施設野菜の減農薬のため、微生物利用の取組が必要とのことである。

現在の農業は、化学肥料農薬により生産されている。恒久的な化学肥料・農薬により何億という微生物が減少による土の不活性により作物に障害が発生し、特に九州のサツマイモの基腐病などの生育障害は顕著である。

今後の農業は、微生物による土づくりが必須であり、微生物により土と野菜の好循環による安全な健康に良い農作物を生産する生産システムの構築が重要であり、生産者が取り組める付加価値のある販売体制の構築が重要と考える。

これらの具体的に進め、オーガニック農業のまち牧之原市とすることで、次世代につながる持続可能な農業を進めたい。

視 察 研 修 報 告 書

牧之原市議会議長 様

1 4 番議員 大石和央

研 修 名	令和4年度 総務建設委員会
研修の期間	令和5年1月25日（水）～1月27日（金）
研 修 先	(1) 福岡県八女市 (2) 宮崎県宮崎市 (3) 宮崎県綾町
研修の目的	(1) 八女福島の町家再生と地域活性化について (2) 青島ビーチパーク事業について (3) 有機農業のまちづくりについて
<p>1, 八女市</p> <p>概要：人口約 61,000 人 面積 482.44 k m² 高齢化率 33.3%</p> <p>(1) 八女福島の伝建地区の歩み</p> <p>1993 年に町並み保存の 2 市民団体が発足。2002 年に重要伝統的建造物群保存地区に指定（福島地区）、2009 年には黒木地区指定。以降様々な NPO が発足して、保存や空き家の再生活動が活発化する。</p> <p>(2) 伝建地区の活動</p> <p>八女福島のまちづくり推進体制を確立して、伝統建築技術の伝承や育成、空き家の再生と移住定住の促進を図る。これまでに建物の保存修理は 162 棟の実績、さらに修理を見込むのは約 90 棟とのことである。</p> <p>(3) 行政の支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ハード：修理修景支援としての補助金、内装での八女産材活用補助 ・組織育成：町並み保存会事業補助金、ふるさと納税型クラウドファンディングの活用 ・ソフト：まちなみ家賃補助、町並み賑わい創出事業費補助金 <p>(4) 考察</p> <p>地域が活性化するには、市民の中に歴史的伝統建築物を保存しようとする熱い想いの人の存在、住民意識の高まりと住民パワーは欠かせない。この意味から八女市の成功事例に学ぶところは、地域素材の活用の見極めと素材の磨き方、活動をリードする人材や組織化、行政のバックアップが重要である。</p> <p>2, 宮崎市青島ビーチ</p> <p>(1) 沿革</p> <p>2014 年（H26）海水浴来場者過去最低とる。（20 万人から 7 万人へ）2015 年公有</p>	

地（県有地を賃借）を活用した「青島ビーチパーク」を開設。2022年度から通年での営業。海水客とビーチパーク来場者数は、新型コロナ前には30万人まで回復。昨年度実績でも9.3万人である。

（2）来場者回復の主な事業

- ・渚の交番青島プロジェクト実行委（観光協会、ライフセービングクラブ）運営
- ・青島ビーチサイド活性化プロジェクト 2017年4月公募。
- ・2019年青島プロジェクト（株）と基本協定締結。
- ・2020年宿泊施設等にNOT A HOTEL（株）参画。
- ・2022年4月飲食エリア開業、10月宿泊施設等全面開業。

（3）考察

自然素材と環境について、自然を残した海岸と砂浜や歴史ある青島神社がマッチしており、2009年に設置された青島渚の交番とが連動している。もともとの素材をどのように活用するのか、あるいはブラッシュアップするのが重要である。説明ではビーチ活性化の取組にキーパーソンの存在が大きかったと聞いた。やはり、事業の成功には仕掛け人（プロデューサー・インフルエンサー）の存在は欠かせない。牧之原市の海岸をどのように活用するのか、これまで様々に議論されてきたが、何が足りないのか、このところに答があるようだ。

3、宮崎県綾町

概要：人口 6800人 面積 95,19 km² 高齢化率 36.8%

（1）農業統計から

- ・農業人口 778人（294戸、24法人）有機農業の割合 0.6%→25%（2050年）
- ・米野菜生産額順 施設キュウリ、米、ブナシメジ、日向夏、マンゴー

（2）有機農業の背景

林業のまちであった綾町が有機農業を目指す歴史には、1967年に国の政策として照葉樹林を針葉樹に転換することに全町民が反対して、照葉樹林の伐採を中止させたことから始まる。自然保護運動から1982年には、「九州中央山地国定公園」に指定され、2012年にはユネスコエコパークに登録されることになる。その後、町民の意識は自然環境保全と農業振興へと移行し、1988年に当時の町長が提案した「自然生態系農業の推進に関する条例」が制定され、化学肥料や農薬、遺伝子組み換え作物の排除をするとともに、本来機能すべき土などの自然生態系を取り戻し、消費者に信頼される農業を確立することを目標とした。

（3）自然生態系農産物の認証、有機 JAS 登録認証機関

町独自の認証基準の仕組みをつくり、安全な食べ物を消費者に提供している。栽培管理記録簿の農産物認証は、3ランク（金・銀・銅）付けられ、農産物直売所「手づくりほんものセンター」で販売される。

また、綾町は有機 JAS 登録認定機関として、有機農産物生産工程管理者、小分け業者、有機加工食品生産工程管理者の認定を行なっている。

ちなみに、有機 JAS 認証は 11 団体、自然生態系農産物認証は 200 人。

(4) 課題

- ・農家の高齢化、担い手の確保
- ・有機農産物（町独自認証・有機 JAS 認証の農産物）の付加価値
- ・価格 UP、市場の基礎価格をどう高めるか
- ・施設野菜の減農薬への取組

(5) 近年の取組

第 2 期綾町まち・ひと・しごと創生総合戦略（R2 年度～R6 年度）を策定して、昨年度は農水省が進めるオーガニックビレッジ宣言をいち早く行ない、今年度は国の交付金 1000 万円を活用して、例えば有機農業を学べる学校の設立（昨年 6 月に開校）、加工流通の取組、学校給食の有機農産物の活用事業を行なっている。ちなみに学校給食については、月 2 回有機食材の提供を行なってきたが、さらに「有機」農産物の定義を厳格にして、有機 JAS 認証や町独自認証の「金」（認証に 3 段階ある）のみを限定し、回数も増やす野心的な取り組みを目指している。そのため「オーガニック給食の推進に関する条例」が町議会で継続審査となっている。

(6) 考察

有機農業に取り組む町の姿勢は、歴史的経緯による住民の環境保全の意識と自然を生かした農業に支えられていると感じた。農家が自然生態系農産物生産に取り組む共同体には、町内 22 集落の自治公民館活動があり、集落ごとの生産者のつながりや農協の生産部門ごとの協議会での連携がある。これらのことが有機農業の原動力となっていることは、課題があるとしても強みではないか。行政視察なので、農家や消費者サイドから意見を聞くことができなかったが、有機農業に取り組むことについてはあまり相違がないと推測する。

わが市での有機農業の展開については厳しいところであるが、まずは市民意識調査として、有機農産物や有機農業についての認識や取り組みについて意見聴取が必要と考える。またマーケット需要の開拓や生産・供給体制支援も重要であり、有機農産物の学校給食提供をも考えなければならない。これら有機農業を推進する計画づくりを始めなければならない。

視察研修報告書

牧之原市議会議長 様

氏名 種茂 和男

研 修 名	令和5年度 牧之原市議会総務建設委員会視察研修
研修の期間	令和5年1月25日(水)～1月27日(金)
研 修 先	(1) 福岡県八女市 (2) 宮崎県宮崎市 (3) 宮崎県綾町
研修の目的	(1) 八女市：八女福島の町家再生と地域活性化について (2) 宮崎市：青島ビーチパーク事業について (3) 綾町：有機農業のまちづくりについて
	<p>(1) 八女市（福岡県）：八女福島の町屋再生と地域活性化について 地域住民、移住者の人の中から、町屋再生に理解している人を探し、事業を始め運営している仲間の中から次世代に引き継ぎできる人を探し、継続運営していく様に対応して、地域活性化の為にまちづくりの進体制をつくり、地元建築士、職人さん達で空き家再生活用に取り組んでいる。 また地域活性化の為に空き家をアンテナショップとして地域住民、借主等が活用してイベント、町屋まつり、宵の市、八女福島の灯籠人形等に参加、参画して地域活性化の賑わいある町家を創出するように推進している。</p> <p>(2) 宮崎市（宮崎県）：青島ビーチパーク事業について 青島ビーチパーク事業は平成26年に過去最低となる海水浴場来場者数を記録した。（通常20万人が7万人に激減した。）またその対策として平成27年に公有地を活用した新しいビーチの楽しみ方を目指して「青島ビーチパーク」を開設した。コンセプトとして海を感じながら、豊かに暮らす自分を体現できるような居心地のよい場所づくりを目指し、令和4年から通年での営業おこない青島ビーチの魅力を高めることによってさらなる来場者の増加を図って行く様に取り組んでいる。 主に渚の交番青島プロジェクト実行委員会が事業運営をしています。</p>

(3) 綾町（宮崎県）：有機農業のまちづくりについて

有機農業のまちづくりの基本は綾町憲章（昭和 58 年 3 月制定）にありました。

- 自然生態系を生かして育てる町にしよう
- 健康で豊かな活力ある町にしよう
- 青少年に誇りと希望をいだかせる町にしよう
- 生活文化に創意と工夫をこらす町にしよう
- 思いやりとふれあいで明るい町にしよう

また綾の自然生態系農業の約束事として

- 1, 化学肥料・農薬などの化学的に合成されたものを使用しない。
- 2, 土の力を最大限に利用する。
- 3, 安全・安心できる農作物を生産する。
- 4, 消費者に信頼される綾町の農業に。 を約束事として掲げている。

●有機農業のまちづくりは自然生態系農業の考え方から始まり、●基本は健全な土づくりから成ります。1, 土壌診断をする。2, 有機質肥料を使用する。3, 深く耕す。4, 土壌消毒剤は使用しない。●また元気な作物を育てるには 1, 化学合成農薬・除草剤は使用しない。2, 遺伝子組み換え作物は利用しない。3, 天敵や微生物農薬等を利用する。また綾町は有機 JAS 登録認証機関であることで基幹産業である農業活性化は町全体の活性化につながる為、生産の取組、加工・流通の取組、消費関連の取組でまちづくりを推進していくよう取り組んでいる。

視察研修報告書

牧之原市議会議長 様

氏名 木村正利

研 修 名	令和5年度 牧之原市議会総務建設委員会視察研修
研修の期間	令和5年1月25日(水)～1月27日(金)
研 修 先	(1) 福岡県八女市 (2) 宮崎県宮崎市 (3) 宮崎県綾町
研修の目的	(1) 八女市：八女福島の町家再生と地域活性化について (2) 宮崎市：青島ビーチパーク事業について (3) 綾町：有機農業のまちづくりについて
<p>(1) 八女市：八女福島の町家再生と地域活性化について</p> <p>八女市は、482.4km²の福岡県で2番目の面積の市で、牧之原市の4倍の広さがあり、産業も農業（八女茶、いちごなど）と伝統工芸が主力であった。高齢化率33.4%、人口密度134人/km²（牧之原市高齢化率R4.12月32.8%人口密度389人/km²）人口密度は当市が勝っている中でも、牧之原市と同様な背景である。</p> <p>八女福島の町家再生の歩みを見ても、感じた事は住民組織である市民団体が中心となっている。</p> <p>「八女福島街並み保存会」の発足から現在に至るまで28年間、空きや再生専門集団が中心となり、NPOを立上、八女市も参画してこつこつと進めて来られて今に至るストーリーを感じる。</p> <p>集客する為の賑わいつくりのポイントは、地元住民の理解、組織づくり、建築技術の人材確保と継承などであり、その先として、観光まちづくりの推進の為の宿泊施設の充実と呼込みツアーの創出が必要である。</p> <p>(2) 宮崎市：青島ビーチパーク事業について</p> <p>青島ビーチサイド活性化プロジェクトを宮崎市は2017年に公募型プロポーザルで宮崎市観光戦略課が企画/公募手続きを行い進めた。</p> <p>主催者は宮崎市大字折生迫財産区で約18,408m²（5,459坪）の土地を1,304万円/年間 月坪/59円・・・3年ごと改定</p> <p>牧之原市片浜小学校における面積は、12,359m²（3793坪）＋建物2896m²（2棟）付き 3年間は、年間/180万円 月坪/40円 3年間、後3年で360万円/年80円/月坪比較として、宮崎市は土地のみ、牧之原市は、土地代＋建物876坪付き</p>	

実施事業者：青島プロジェクト株式会社（代表 山本順二）

宿泊施設等：NOT A HOTEL（代表 瀧渦伸次氏）

青島ビーチへの来場者増加と地域経済と青島地域活性化を目的として
渚の交番プロジェクト実行委員会が立ち上がる

NPOライフセービング協会＋観光協会

キーポイントとして、地元建築士会とワークショップ。移住者宮原秀雄氏のアドバ
イスなど中心人物が最後まで係る事、そこに宮崎市が積極的にフォローする。

牧之原市においても、日本財団プロジェクトは取入れたいと感ずる

また、市がコンセッション方式を取入れた、白浜オートキャンプ場のコンセッショ
ン方式は魅力的である。賃借料を600万円として、自由に改修し、利益が出たらそ
の分の利益を市に還元し、相互のやる気が出ているように感ずる

（3）綾町：有機農業のまちづくりについて

有機農業に対する町長の長年の取組により今現在がある

綾町は、人口6,785人（4年で400人減少）

綾町憲章は、自然生態系を生かして育てる町にしようなど…昭和58年3月制定

基幹産業は農業 1961年の農業基本法の制定から化学肥料、化学合成肥料の使用
等進められる中、いち早く、自然体系農業に特化した農業に取組まれた事が現在の
消費者に信頼される綾町である

ここでも、事業実施主体は、「綾町自然生態系農業推進会議」であり（町・農協・
商工会・農業委員会）が中心となり地域の農業者代表たちが真剣に取り組んでいる
様子が伺えた。

最後に伺った、基本8反以上の農地により400万円の黒字を生む農業でなくてはな
らないという基準は、その他農業に係る農業者の方向性とも感じた

頂いた資料を分析しても、米の作付け面積、生産トン、生産額から読み取ると

1反当たりの収穫額は、一俵/14,138円 施設胡瓜は、1本当たり48円の金額であ
り、まだまだ、農業による、個人生産者では、専業にての生活は難しく思う

綾町においても宮崎市への就業者が多く、日中人口は少ない

有機栽培品だから、値段に転嫁できるかということと現実はそうではない

また、牧之原市においても、安心・安全な食は今取り組んで行かなければならない
事からお茶も含め自然生態系農業推進会議展開をするべきである。

明るい報告として、安心・安全な食を求める都会の人々からふるさと納税による
野菜定期便が近年特に増え、それぞれを袋詰め、梱包作業する人が増えて雇用
増加している

総括として、それぞれの視察先の共通点として

- ① 事業取組については、中心人物がいて、それを支える、住民の理解が必要である
- ② 組織が重要
八女市福島街並み保存会
青島プロジェクト
渚の交番青島プロジェクト実行委員会
綾町自然生態系農業推進会議
- ③ 行政が継続的にかかわる事
例 八女市福島に係る職員は約 20 年間関わっている
- ④ 住民の理解・・・諦めず、最後まで合意形成を進める

プロジェクト推進に係る重要課題と考える

視察研修報告書

牧之原市議会議長 様

氏名 名波 和昌

研 修 名	令和5年度 牧之原市議会総務建設委員会視察研修
研修の期間	令和5年1月25日(水)～1月27日(金)
研 修 先	(1) 福岡県八女市 (2) 宮崎県宮崎市 (3) 宮崎県綾町
研修の目的	(1) 八女市：八女福島の町家再生と地域活性化について (2) 宮崎市：青島ビーチパーク事業について (3) 綾町：有機農業のまちづくりについて
<p>(1) 八女市（八女福島の町屋再生と地域活性化について）</p> <p>訪問前のイメージは、町屋そのものが多く存在しているとは考えていなかったが、そもそも城下町であったことから、多くの町屋が現存していたことが、それを再生することにより地域活性化にも連動していることがわかった。</p> <p>また、伝建地域の認定も大きな下地となっており、同じ城下町としての歴史をもつ牧之原市（相良城・勝間田城）とは大きな違いがあった。牧之原市の場合は歴史的建築物等が少なく、商店街や沿岸部を基盤にした地域活性化を主体として考えていかなければならず、少し意味合いが相違しているが、地場のものを活用して活性化をしていくヒントは得ることができた。ただ、八女市の場合は多くの資金投入をしており、補助金等の活用についても参考になった。</p> <p>(2) 宮崎市（青島ビーチパーク事業）</p> <p>青島はかねてより、新婚旅行先、プロ野球のキャンプ地、プロゴルフトーナメント開催地、シーガイア（現在は解体されている）等の観光資源が豊富であることが印象であった。そんな中で牧之原市を大幅に上回る海岸線を有しており、当市と同様に海水浴客の減少を回復させる必要性があり、大いに期待した。</p> <p>回復には地元行政当局はもとより、移住者であるプロデューサーとインフルエンサーの力が大きかったとのこと。やはり、従来とは違った角度から街を俯瞰していくことの大切さを痛感した。当市の海岸地域にも年間を通して喫茶店やサーフショップ等があるが、海岸から少し離れており、青島のような海辺とは異なり、この点も「海」をアピールするには不利な点と感じた。</p> <p>また、海岸地域は県（国）有地から市管理地に変更できたことは、当市でも今後</p>	

の海岸地域の開発に関して前例として今後アピールできるものとする。いずれにしても、市民はもとより県内外へのアピールをどのように仕掛けていくかが重要である。

(3) 綾町（有機農業のまちづくり）

綾町は「自然生態系を生かして育てるまちにしよう」との基本理念により林業はもとより、農業の改革をすすめてきた。その中で選択されたことが「有機農業」で、土壌づくりからはじめ、現在は有機JAS認定機関としても登録されている。

有機農業を推進するにあたっては、行政が積極的に推進することだけでなくJAとの連携も大きなポイントと考える。さらに家庭ごみ（生ごみ）等を有効に活用して有機肥料として活用できるサイクルを作り上げたことは、なかなかできないことではないか。有機農法を進めるには近接農地への影響等多くの課題があるが、そこは行政が積極的に調整していることも拡大につながっていると推察する。

また有機農産物を積極的にふるさと納税品としている点も生産者から見れば魅力となっているものと思う。

時間の都合で有機農産物の販売所を見学できなかったことがざんねんであった。

<総括>

他市町の地域おこしや活性化施策を実際に現地で感じる事ができて感謝しています。この経験をそのまま当市の持続性のあるまちづくりに持ち込むことは、なかなか難しいことではあるが、取り入れられる点は多くあり、今後の提言書につなげていきたいと考える。

視察研修報告書

牧之原市議会議長 様

氏名 谷口 恵世

研 修 名	令和5年度 牧之原市議会総務建設委員会視察研修
研修の期間	令和5年1月25日(水)～1月27日(金)
研 修 先	(1) 福岡県八女市 (2) 宮崎県宮崎市 (3) 宮崎県綾町
研修の目的	(1) 八女市：八女福島の町家再生と地域活性化について (2) 宮崎市：青島ビーチパーク事業について (3) 綾町：有機農業のまちづくりについて
<p>(1) 福岡県八女市</p> <ul style="list-style-type: none">・八女福島地区の伝建地区のまちづくりについて視察 明治からの造り酒屋をH30にリニューアルオープンした「横町町家交流館」にて説明をうける。 八女福島では、平成3年の台風被害をきっかけに地元の有志の「市民の財産である町並みを保存しよう」という気運が盛り上がり、平成7年から国土交通省の「街なみ環境整備事業」を活用して建物の修理事業が始まった。平成14年には旧往還道沿いを中心に19.8haが国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定された。保存地区では固有の景観を守るため、建物の修理や新築等の建て方のルールをつくり、住民と行政が力を合わせて、さらにNPO等の活動が活発化し、町並みの保存継承が進んでいる。地元住民の理解については、地域によってモチベーションが異なり、賛否はあるが、同意7割で事業を進めている。 活動を持続させるリーダーと担い手づくり、行政と地域組織の連携と支援の継続が不可欠である。 <p>(2) 宮崎県宮崎市</p> <p>平成26年に過去最低となる海水浴場来客数を記録(20万人→7万人) 翌年に公有地活用「青島ビーチパーク」開設。 令和4年度からは通年営業を行い、夏季以外でも青島ビーチの魅力を高めることで、更なる来場者数の増加を図る。 事業主体：渚の交番青島プロジェクト実行委員会(指定管理者)</p>	

(公益社団法人宮崎市観光協会とNPO法人宮崎ライフセービングクラブの共同体)

- ・スタートするには、民間リーダーの存在が不可欠
- ・現在は地価も上昇し、経済が自走し始めている

(3) 宮崎県綾町

自然生態系農業（有機農業）推進（昭和63年7月条例に制定）のまち
事業実施主体：綾町自然生態系農業推進会議

(町・農協・ほんものセンター・生産者組織)

事務局：有機農業開発センター

(普及推進機関・生産指導・自然生態系農産物認証業務・JAS認証業務・土壌診断)

綾町の自然生態系農業システム

昭和53年 自給肥料提供センター設置（町内のし尿を液状堆肥化）

昭和56年 家畜糞尿処理施設設置

昭和62年 家庭雑廃コンポスト施設設置（家庭生ごみを堆肥化）

環境問題の源である家庭生ごみ・し尿・家畜糞尿等あらゆる資源をリサイクルして自然生態系農業に活かしている。

- ・ふるさと納税額6億強のうち、約7～8割が野菜での返礼品
- ・今後の主な取り組み
有機農業を学べる学校設立（みどりの食料システム補助金1千万円活用）
除草作業の省力化実証
等
- ・コロナ影響もあり、有機農業生産者は300名→200名に減
- ・有機JAS認証（年間160万）は行うが、販売サポートは行わないため
個人で販路開拓（ネット・イオン・グリーンコーポ・BIO等）

総括

各市まちとも地理的、文化的要因等は様々あるが、
官民連携のまちづくりが成功要因には不可欠であることを感じた。